

## 天使の書（金澤翔子書道展）

三越では、9月4日から10日までの日程で、金澤翔子書展が開催されました。

金澤翔子さんのご活躍は、NHKの大河ドラマ「平清盛」の題字を書いていますので、ご承知の方も多いと思います。私は、以前から、彼女の活動の様子をテレビ等で承知していましたので、今回の書展を楽しみにしていました。

実際に、書展の会場に入ると、静かな中にも、翔子さんが一文字一文字に渾身の力を込めて書いた、その息遣いが聞こえて来るようでした。

翔子さんの作品は、自由と奔放という表現が一番ふさわしいように感じますが、それは、彼女の書に向き合う姿勢にも表れています。会場では、彼女が大きな紙に書を書く様子がビデオで紹介されていましたが、体全体を使って筆を使う姿を見ていて、「エネルギーがほとばしる」というのはこういう事かと感じさせられました。

金澤翔子さんは、1985年6月生まれ、現在27歳になります。母泰子さんは、42歳の時に翔子さんを出産しますが、ダウン症と診断された時、相当にショックを受けられたようです。

泰子さんは「決して夢ではないのだ、私の娘はダウン症なのだ。と自覚して、立ち上がるまでの苦しい日々は想像を絶する。1、2年を要した。」と率直に語ると共に「私達二人ともよちよちと迷い、悩み、期待と絶望を繰り返して生きて20余年経った。生きてさえいれば、過ぎ去った思いは不思議で、今はすべてが楽しい思い出になっている。」と述べています（金澤泰子著「天使の正体」から）。

そして、そう思える迄になったのは、20数年掛けて泰子さんが取り組んで来た、障がい者の母としての一大事業でした。その一大事業とは、書家であった泰子さんが、翔子さんを書家として育て上げるという事でした。

泰子さんは、「どんなに変であろうが、おかしかろうが、”本当は〇〇”があるという人生は素晴らしいではないか。どのように生きてもいい、一生を貫いて最終的に自分を信じる事ができる確かなものがあればいい、と私は思う。拙い子育ての中で、唯一私が翔子に与えてあげられることは、この一つ「書の道」であったと思う。」と述べています（前述書から）。

翔子さんが、母親から書を習い始めたのは5歳頃からとの事ですが、翔子さ

ん自身に書の才能が潜んでいたのでしょうか、その後、書家への道を真直ぐに進むこととなります。

翔子さんは、14歳から17歳まで毎年日本学生書道文化連盟展に作品を出品し、いずれも金賞や銀賞に輝いています。また、2009年に建仁寺に奉納した「風神雷神」は、見る人に大きな感動を与えていますし、前述したように、今年のNHKの大河ドラマ「平清盛」の題字を担当しています。

どうして、このような奇跡のようなことが起こったのでしょうか。翔子さんに与えられた天賦の才能が大きかったであろうことは、いう迄もありません。

しかし、同時に、母泰子さんはじめ、多くの方々の理解と支援がなければ、彼女の才能が開花する事はなかったことでしょう。

ダウン症は、染色体の異常によって引き起こされる症状で、全身の筋力の低下や心臓の異常、食道閉鎖症など内臓にも異常が起こる例が多く、かつては20歳を超えて生きるケースは少ないといわれていましたが、最近は、翔子さんのように生存年齢が伸びて来ているともいわれています。

泰子さんは、翔子さんについて、「ダウン症者としての欠陥は数多くあるが、目を凝らし、耳を澄ましてよく見ると、この混濁の世にあって、20歳過ぎまでよく保持できたものだ后感心する二つの屹立した大きな特徴に支えられている」と述べています。そして、その第一の特徴は「純粹培養された、純度の高い魂」を持っている事であり、第二の特徴は「何にも毀されることのない、ダイヤモンドのように強い「先天的な他者を思いやる心」を持っている事だと述べています（前述書から）。

この二つの特徴は、ダウン症児が天使と呼ばれる所以かも知れません。

しかし同時に、泰子さんもおっしゃるように、翔子さんを含めダウン症児が、「将来にわたって完結した自立ができない」という現実から目を背けることは出来ません。

泰子さんは、「いつ死んでもいいけれど、今は死ねない」といいます。この思いは、障がい児を持つ全ての親に共通したものでしょう。彼女は「私は60歳半ばにさしかかる。死はそんなに遠くではあるまい。私の亡き後の翔子の身の振り方については、考えあぐねた末に、色々手配したし、多分大丈夫であろう。しかしどんなに手配したところで私に死期は決められないし、死後のことは支配できない。その時、その場にいてくれる方が助けてくれるであろう。その方達におまかせする外、手立てはあるまい。その人達が翔子に愛情を持って接して下さるように、私がきちっと今を生きなければならない」と述べています（前述書から）が、彼女の、その凜とした佇まいが、翔子さんを素晴らしい書家に育て上げたのだなと改めて感じています。（塾頭 吉田 洋一）